

「コンピュータ断層撮影の有効な使用のために」の印象記

放射線医学総合研究所医学物理部名誉研究員

飯沼 武

1)はじめに

上記の論文は日本医事新報に昭和 53 年 5 月 27 日付けで発表された論文です。筆頭著者は当時、東京大学医学部放射線科の教授であった田坂 皓先生です。この研究はコンピュータ断層撮影(CT)が日本に昭和 50 年に導入されてから、急速に普及してゆく現状を見て、その有効な使用法を検討するためなされたものです。筆者も関係した一人として感想を書かせて頂きました。

田坂先生を代表者とする厚生省の医療研究助成金班会議「コンピュータ断層の役割に関する研究」が昭和 51 年に開始され、その結論を発表したのが本論文であります。CT 導入当初の歴史的な経緯を示す資料です。

2)班会議の構成

班会議は代表の田坂先生をはじめとして、班員には有水 昇(千葉大)、梅垣洋一郎(放医研)、喜多村孝一(東京女子医大)、久留 裕(順天堂大)、小林直紀(東京女子医大)、佐野圭司(東大)、高橋信次(浜松医大)、高橋睦正(秋田大)、玉木正男(大阪市大)、西岡清春(慶大)、野辺地篤郎(聖路加)、蜂屋順一(関東通信)、藤井恭一(国立医療セ)、松浦啓一(九大)、柄川 順(帝京大)の各先生、幹事として、竹中栄一(東大)、舘野之男(放医研)、飯沼 武(放医研)が加わっていました。班員のお名前を見ると、その当時の第一線で活躍されていた先生がずらりと顔をそろえており、正に壮観です。班会議の下に、(1)CT 設置基準小委員会と(2)CT 装置性能評価小委員会の二つが設けられ、検討を開始しました。本報は前者の報告であります。

3)本報告の結論

詳細は本文をお読み頂くとして、結論だけを列記します。(1)CT は有用ではあるが、この高価な装置を有効に使用するためには人員措置が必要である。(2)地域によっては患者数が少なく、収支が償わない場合が予想されるがその助成を行なうべきである。(3)診断精度向上のための方法を具体化すべきである。(4)CT 診療費の健康保険適用を早急に進めるべきである。(5)CT 設置基準案を参考として適正配置が考慮される必要がある。(6)本報告は、近い将来に見直しをする必要がある。以上が、結論でした。

とくに、CT の設置台数については、日本全国の脳血管疾患の発生数から 1100 台

程度、また、200床以上の病院に導入するとした場合は1300台程度と予測した。

4)その後の経過

本報告が発表された後、実は、CTの導入は目覚しく、あっとゆうまに筆者らが予想していた1000台を超えた。その後は頭部から全身のCTに進化したことにより適用範囲が全く変化したことがあげられます。予想は完全に外れたといっただよいでしょう。

日本におけるCTの導入台数は人口当たりによれば、アメリカを抜いて世界一であり、ここまで普及するとは、だれも予想しなかったのではないのでしょうか？勿論、CTの発展はものすごく、2008年現在では医療の現場になくはならない装置として定着していることは申すまでもありません。

課題は日本ではCT検査が多いことから、医療被曝も世界で最も多い国になっています。私は医療被曝が多いこと事態を問題にすべきではないと思います。医療にはそれに見合う利益があるからです。今後は無駄な検査を極力制限し、適正なCT検査を行なうこと、被曝線量の最適化を計ることが必要であります。放射線医学関係者の責任は重大です。